東京小品

芥川龍之介

鏡

自分は無暗(むやみ)に書物ばかり積んである書斎の中に蹲(うづくま)つて、寂しい春の松の内を甚(はなはだ)だらしなく消光してゐた。本をひろげて見たり、好(い)い加減な文章を書いて見たり、それにも飽きると出たらめな俳句を作つて見たり――要するにまあ太平の逸民(いつみん)らしく、のんべんだらりと日を暮してゐたのである。すると或日久しぶりに、よその奥さんが子供をつれて、年始旁々(かたがた)遊びに来た。この奥さんは昔から若くつてゐたいと云ふ事を、口癖のやうにしてゐる人だつた。だからつれてゐる女の子

がもう五つになると云ふにも関(かかは)らず、まだ娘の時分の美しさを昨日(きのふ)のやうに保存してゐた。

　その日自分の書斎には、梅の花が活(い)けてあつた。そこで我々は梅の話をした。が、千枝(ちえ)ちやんと云ふその女の子は、この間中(あひだぢう)書斎の額(がく)や掛物(かけもの)を上眼(うはめ)でぢろぢろ眺めながら、退屈さうに側に坐つてゐた。

　暫(しばら)くして自分は千枝ちやんが可哀(かはい)さうになつたから、奥さんに「もうあつちへ行つて、母とでも話してお出でなさい」と云つた。母なら奥さんと話しながら、しかも子供を退屈させない丈(だけ)の手腕があると思つたからである。すると奥さんは懐(ふところ)から鏡(かがみ)を出して、そ

れを千枝ちやんに渡しながら「この子はかうやつて置きさへすれば、決して退屈しないんです」と云つた。

　何故（なぜ）だらうと思つて聞いて見ると、この奥さんの良人（をつと）が逗子（づし）の別荘に病（やまい）を養つてゐた時分、奥さんは千枝（ちえ）ちやんをつれて、一週間に二三度宛（づつ）東京逗子間を往復したが、千枝ちやんは汽車の中でその度に退屈し切つてしまふ。のみならず、その退屈を紛（まぎ）らしたい一心で、勝手な悪戯（いたづら）をして仕方がない。現に或時はよその御隠居（ごいんきよ）様をつかまへて「あなた、仏蘭西（フランス）語を知つていらつしやる」などととんでもない事を尋ねたりした。そこで奥さんも絵本を渡したり、ハモニカをあてがつ

たり、いろいろ退屈させない心配をしたが、とうとうしまひに懐鏡（ふところかがみ）を持たせて置くと、意外にも道中（だうちう）おとなしく坐つてゐる事実を発見した。千枝ちやんはその鏡を覗（のぞ）きこんで、白粉（おしろい）を直したり、髪を掻（か）いたり、或は又わざと顔をしかめて見り、鏡の中の自分を相手にして、何時（いつ）までも遊んでゐるからである。

奥さんはかう鏡を渡した因縁（いんねん）を説明して、「やつぱり子供ですわね。鏡さへ見てゐれば、それでもう何も忘れてゐられるんですから。」とつけ加へた。

自分は刹那（せつな）の間（あひだ）、この奥さんに軽い悪意を働かせた。さうして思はず笑ひながら、こんな事を云つて冷評（ひやか）し

た。

「あなただつて鏡さへ見てゐれば、それでもう何も忘れてゐられるんぢやありませんか。千枝(ちえ)ちやんと違ふのは、退屈なのが汽車の中と世の中だけの差別ですよ。」

下足札

これも或松の内の事である。Hと云ふ若い亜米利加(アメリカ)人が自分の家へ遊びに来て、いきなりポケツトから下足札(げそくふだ)を一枚出すと、「何(なん)だかわかるか」と自分に問ひ

かけた。下足札はまだ木の匂（にほひ）がする程新しい板の面（おもて）に、俗悪な太い字で「雪の十七番」と書いてある。自分はその書体を見ると、何故（なぜ）か両国（りやうごく）の橋の袂（たもと）へ店を出してゐる甘酒屋（あまざけや）の赤い荷を思ひ出した。が、元より「雪の十七番」の因縁（いんねん）なぞは心得てゐる筈がなかつた。だからこの蒟蒻問答（こんにやくもんだふ）の雲水（うんすゐ）めいた相手の顔を眺めながら、「わからないよ」と簡単な返事をした。するとHは鼻眼鏡（めがね）の後（うしろ）から妙な瞬（またた）きを一つ送りながら、急ににやにや笑ひ出して、

「これはね。或芸者の記念品（スヴニイル）なんだ。」

「へへえ、記念品（スヴニイル）にしちや又、妙なものを貰つたもん

だな。」

自分たちの間(あひだ)には、正月の膳(ぜん)が並んでゐた。Hはちよいと顔をしかめながら、屠蘇(とそ)の盃(さかづき)へ口をあてて、それから吸物の椀(わん)を持つた儘、娓々(びび)としてその下足札の因縁を辯じ出した。――

何(なん)でもそれによると、Hの教師をしてゐる学校が昨日(きのふ)赤坂(あかさか)の或御茶屋で新年会を催(もよほ)したのださうである。日本に来て間(ま)もないHは、まだ芸者に愛嬌(あいけう)を売るだけの修業も積んでゐなかつたから、唯出て来る料理を片つぱしから平(たひ)らげて、差される猪口(ちよく)を片つぱしから飲み干してゐた。するとそこにゐた十人ばかりの芸

者の中に、始終彼の方（はう）へ秋波（しうは）を送る女が一人（ひとり）あつた。日本の女は踝（くるぶし）から下を除いて悉（ことごと）く美しいと云ふＨの事だから、勿論この芸者も彼の眼には美人として映じたのに相違ない。そこで彼も牛飲馬食（ぎういんばしよく）する傍（かたはら）には時々そつとその女の方を眺めてゐた。

　しかし日本語の通じないＨにも、日本酒は遠慮なく作用する。彼は一時間ばかりたつ中（うち）に、文字（もじ）通り泥酔（でいすゐ）した。その結果、殆（ほとん）ど座に堪へられなくなつたから、ふらふらする足を踏みしめてそつと障子（しやうじ）の外へ出た。外には閑静な中庭が石燈籠（いしどうろう）に火を入れて、ひつそりと竹の暗をつくつてゐる。Ｈは朦朧（もうろう）たる酔眼（すゐがん）にこの景色

を眺めると、如何(いか)にも日本らしい好(い)い心もちに浸(ひた)る事が出来た。が、この日本情調が彼のエキゾテイシズムを満足させたのは、ほんの一瞬間の事だつたらしい。何故(なぜ)と云ふと彼が廊下(らうか)へ出るか出ないのに、後(あと)を追つてするすると裾を引いて来た芸者の一人(ひとり)が突然彼の頸(くび)へ抱(だ)きついたからである。さうして彼の酒臭い脣(くちびる)へ潔(いさぎよ)い接吻をした。勿論(もちろん)それはさつきから、彼に秋波を送つてゐる芸者だつた。彼は大(おほい)に嬉しかつたから、両手でしつかりその芸者を抱いた。

ここまでは万事が頗(すこぶ)る理想的に発展したが、遺憾ながら抱(だ)くと同時に、急に胸がむかついて来て、Hは

その儘その廊下へ甚だ尾籠(びろう)ながら嘔吐(へど)を吐いてしまつた。しかしその瞬間に彼の鼓膜(こまく)は「私はX子と云ふのよ。今度御独りでいらしつた時、呼んで頂戴」と云ふ宛転(ゑんてん)たる嬌声(けうせい)を捕へる事が出来た。さうしてそれを耳にすると共に、彼は恰(あたか)も天使の楽声(がくせい)を聞いた聖徒(セエント)のやうに昏々(こんこん)として意識を失つてしまつたのである。

Hは翌日の午前十時頃になつて、やつと正気(しやうき)に返る事が出来た。彼はその御茶屋の一室で厚い絹布(けんぷ)の夜具に包まれて、横になつてゐる彼自身を見出した時、すべてが恰(あたか)も一世紀以前の出来事の如く感ぜられた。が、その中でも自分に接吻した芸者の姿ばかりは歴々

として眼底に浮んで来た。今夜にもここへ来て、あの芸者に口をかけたら、きつと何を措（お）いても飛んで来るのに違ひない。彼はさう思つて、勢ひよく床の中から躍り出た。が、酒に洗はれた彼の頭脳には、どうしてもその芸者の名が浮んで来ない。名前もわからない芸者に口がかけられないのは、まだ日本の土を踏んで間（ま）もない彼と雖（いへど）も明白である。彼は床の上に坐つた儘、着換をする元気も失つて、悵然（ちやうぜん）と徒（いたづ）らに長い手足を見廻した。――

「だから、その晩の下足札（げそくふだ）を一枚貰つて来たんだ。これだつてあの芸者の記念品（スヴニイル）にや違ひない。」

Hはかう云つて、吸物椀（すゐものわん）を下に置くと、松の内にも似合はしくない、寂しさうな顔をしながら、仔細（しさい）らしく鼻眼鏡をかけ直した。

漱石山房（そうせきさんばう）の秋

夜寒（よさむ）の細い往来（わうらい）を爪先上（つまさきあが）りに上（あが）つて行（ゆ）くと、古ぼけた板屋根の門の前へ出る。門には電燈がともつてゐるが、柱に掲（かか）げた標札（へうさつ）の如きは、殆（ほとん）ど有無（うむ）さへも判然しない。門をくぐると砂利（じやり）が敷いてあつて、その又砂利の上には庭樹の落葉が紛々（ふんぷん）として乱れてゐる。

砂利と落葉とを踏んで玄関へ来ると、これも亦（また）古ぼけた格子戸（かうしど）の外（ほか）は、壁と云はず壁板（したみ）と云はず、悉（ことごと）く蔦（つた）に蔽（おほ）はれてゐる。だから案内を請はうと思つたら、まづその蔦の枯葉をがさつかせて、呼鈴（ベル）の鈕（ボタン）を探さねばならぬ。それでもやつと呼鈴（ベル）を押すと、明りのさしてゐる障子が開いて、束髪（そくはつ）に結（ゆ）つた女中が一人（ひとり）、すぐに格子戸の掛け金を外（はづ）してくれる。玄関の東側には廊下（らうか）があり、その廊下の欄干（らんかん）の外（そと）には、冬を知らない木賊（とくさ）の色が一面に庭を埋（うづ）めてゐるが、客間の硝子（ガラス）戸を洩（も）れる電燈の光も、今は其処（そこ）までは照らしてゐない。いや、その光がさしてゐるだけに、向うの軒先に吊（つる）し

た風鐸の影も、反つて濃くなつた宵闇の中に隠されてゐる位である。

硝子戸から客間を覗いて見ると、雨漏りの痕と鼠の食つた穴とが、白い紙張りの天井に斑々とまだ残つてゐる。が、十畳の座敷には、赤い五羽鶴の毯が敷いてあるから、畳の古びだけは分明でない。この客間の西側（玄関寄り）には、更紗の唐紙が二枚あつて、その一枚の上に古色を帯びた壁懸けが一つ下つてゐる。麻の地に黄色に百合のやうな花を繍つたのは、津田青楓氏か何かの図案らしい。この唐紙の左右の壁際には、余り上等でない硝子戸の本箱があつて、そ

の何段かの棚の上にはぎつしり洋書が詰まつてゐる。それから廊下に接した南側には、殺風景（さつぷうけい）な鉄格子（てつがうし）の西洋窓の前に大きな紫檀（したん）の机を据ゑて、その上に硯（すずり）や筆立てが、紙絹（しけん）の類や法帖（ほふでふ）と一しよに、存外行儀（ぞんぐわいぎやうぎ）よく並べてある。その窓を剰（あま）した南側の壁と向うの北側の壁とには、殆（ほとん）ど軸の挂（か）かつてゐなかつた事がない。蔵沢（ざうたく）の墨竹（ぼくちく）が黄興（くわうこう）の「文章千古事（ぶんしやうせんこのこと）」と挨拶（あいさつ）をしてゐる事もある。木庵（もくあん）の「花開万国春（はなひらくばんこくのはる）」が呉昌碩（ごしやうせき）の木蓮（もくれん）と鉢合（はちあは）せをしてゐる事もある。が、客間を飾つてゐる書画は独りこれらの軸ばかりではない。西側の壁には安井曾太郎（やすゐそうたらう）氏の油絵の風景画が、東側の壁には

斎藤与里氏の油絵の艸花が、さうして又北側の壁には明月禅師の無絃琴と云ふ艸書の横物が、いづれも額になつて挂かつてゐる。その額の下や軸の前に、或は銅瓶に梅もどきが、或は青磁に菊の花がその時々で投げこんであるのは、無論奥さんの風流に相違あるまい。

　もし先客がなかつたなら、この客間を覗いた眼を更に次の間へ転じなければならぬ。次の間と云つても客間の東側には、唐紙も何もないのだから、実は一つ座敷も同じ事である。唯此処は板敷で、中央に拡げた方一間あまりの古絨毯の外には、一枚の畳も敷いてはない。さうして東と北と二方の壁には、新古和漢洋

の書物を詰めた、無暗に大きな書棚が並んでゐる。書物はそれでも詰まり切らないのか、ぢかに下の床の上へ積んである数も少くない。その上やはり南側の窓際に置いた机の上にも、軸だの法帖だの画集だのが雑然と堆く盛り上つてゐる。だから中央に敷いた古絨毯も、四方に並べてある書物のおかげで、派手なるべき赤い色が僅ばかりしか見えてゐない。しかもそのまん中には小さい紫檀の机があつて、その又机の向うには座蒲団が二枚重ねてある。銅印が一つ、石印が二つ三つ、ペン皿に代へた竹の茶箕、その中の万年筆、それから玉の文鎮を置いた一綴りの原稿用紙――

—机の上にはこの外に老眼鏡が載せてある事も珍しくない。その真上には電燈が煌々と光を放つてゐる。傍には瀬戸火鉢の鉄瓶が虫の啼くやうに沸つてゐる。もし夜寒が甚しければ、少し離れた瓦斯煖炉にも赤々と火が動いてゐる。さうしてその机の後、二枚重ねた座蒲団の上には、何処か獅子を想はせる、背の低い半白の老人が、或は手紙の筆を走らせたり、或は唐本の詩集を飜したりしながら、端然と独り坐つてゐる。

……

漱石山房の秋の夜は、かう云ふ蕭條たるものであつた。

底本：「筑摩全集類聚　芥川龍之介全集第四巻」筑摩書房
　　１９７１（昭和46）年６月５日初版第１刷発行
　　１９７９（昭和54）年４月10日初版第11刷発行
入力：土屋隆
校正：松永正敏
２００７年６月26日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんで

す。